

朝のヨット

山川方夫

青空文庫

あけぼの
 曙の色がほのかに東の空を染めて、間もなくその日の最初の太陽の光が、はるかな海面を錫箔すずはくのように輝かせた。洋上はまだ薄暗く、空と海の境もはつきりしなかつたが、とにかく、海には朝が来ていた。

かもめ
 鷗が一羽、そのヨツトの上空で、ゆるやかに翼を上下していた。鷗は、まるでどこまでも離れない決心をしたもののように、そのヨツトと方向と速度を一つにして、朝空を動くかなりの風の中をと翔びつづけた。

「行ってくるよ」

少年はスナイプ型のヨットに乗り、その舳綱もやいを解きながら、少女に声をかけた。

「ねえ、つれて行って。私も」

「だめだったら」

少年は、怒ったような声音だった。

「海は、二人でたのしみに出かける場所じゃない。人間が、一人きりでぶつかりに行く相手なんだ」

「私よりも、海のほうが好きなの？」

少年はいらだち、神経質に眉まゆをよせた。

「君といっしょにしていると、僕は、ときどきもう一人の自分が、ひどく遠いところに置き去りにされているような気分になる。僕は、

そのもう一人の自分を取りもどすために海へ行くんだ。……海は、人間を本当の一人きりにしてくる場所だからね」

「どうして一人きりになりたがるの？」

「女にはわからないさ」

少年はきびしい顔で答え、ふいに白い歯を光らせて笑いかけた。そして、いった。

「君を好きだよ」

スナイプは、すでに岸を離れていた。白い帆を斜めに、ぐんじよ群

青の午後の海をすべって行くヨットを見て、少女は目に涙がうかんできた。だが、少女は笑顔のまま手を振りつづけた。急速にひろがる二人の距離、明るいその海面の広さを、そのまま、遠ざ

かる帆の速さで彼女の胸を裂き、ひろがる一つの疵きずぐち口のように感じながら。……

少年はそして海に消えた。沿岸や離島の各所からの返電はすべて『到着ナシ』であつた。急変した天候、突風と小さな竜巻とが、どうやら、その理由を語っていた。

少女は海を見ていた。しめつぽく肌に重い早朝の潮風の中を、幾艘いくそうかのヨットが、少年のスナイプを求めてはしっていた。

黒い海は、やがてその底の蒼緑あおみどりいろ色と、表面の波立ちとをあきらかにし、舷げんに散る白い飛沫ひまつを縫い、ほのかに細い虹にじの脚が明滅した。糠雨ぬかあめのようなこまかな繁吹しぶきが少女の頬ほおを濡ぬらして、そ

のくせ澄んだ浅い色の空は、その日の上天氣を約束していた。

海は、嘘うそのように凧ないでしまっていた。

「……なぜなの？　なぜ、一人きりになりに行かなくちやならなかったの？」

少女は、昨夜から幾百回となくくりかえした言葉をまた唇にかべた。ふと、砂浜での少年との愛撫あいぶの記憶がよみがえって、あの夜も砂を叩たたきつけ怒ったような顔で、逃げるように夜の海に走りこんだ少年を想おもっていた。何故なぜなの？　あるときもあなたは必死に「一人きり」にしがみつこうとしていた。まるで、私よりも、自分の孤独さの確認のほうを愛しているみたいに……。

でも、どうしてなの？　私たち、愛しあっていたのよ。私の中

にあなたはいて、あなたの中に私はいて、どうしても、どこへ行つても「一人きり」になんかなれないのに。それなのに、どうして一人きりになんてなりたがるの？ ……私を、きらいだったの？ いいえ、そんなはずないわ。だって、あなた、「君を好きだよ」っていつてくれたじゃない。

湧^わきつづける涙のため、明るく平坦な初夏の朝の海は、いつまでも少女の視野でぼやけ、揺れ動いた。……だが、その海こそが、いまは彼女の中の一つの巨大な疵^{きずぐち}口であり、そこに永遠の、無限の沈黙を見る少女の目は、もはやただ一つの問いかけなのでしかなかつた。彼女はくりかえした。

「ねえ、教えて。あなた、なぜ、一人きりになりに行かなくちや

ならなかったの？」

鷗かもめは、どこまでもその少女とヨットを追い、翔とびつづけた。薄らぎかかると記憶の中で、鷗は少女に自分がただ、自分だけの充実を追った幼い恋人だったことを告げたかった。自分が、臆おくびよう病びような一箇の旅人にふさわしいこの姿でいることを告げたかった。

だが、いくら喉のどをふりしぼって鷗が努力しても、その叫びは、猫に似た単調な啼なごえき声こゑにしかならなかった。……そして、いつのまにか鷗は自分の飛ひしやう翔しようの意味を忘れ、孤独のさわやかさも、愛することの恐怖も屈辱もそのよるこびも忘れはてて、ただ少女のヨットの上、全身を洗う透明な朝の風の中で猫の啼き声をくりか

えして、無心にそのゆるやかな翼の抑揚をつづけていた。

青空文庫情報

底本：「夏の葬列」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年5月25日第1刷

2014（平成26）年6月17日第14刷

初出：「美術手帖 Vol.15 No.222」

1963（昭和38）年7月号

※底本巻末の编者による語注は省略しました。

※「なぜ」「何故」の混在は、底本通りです。

入力：かな とよみ

校正：noriko saito

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

朝のヨット

山川方夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>